

「主の奉献の祝日」の説教

金 大烈 神父 2010年2月2日(火)

《心からの奉献》

今日は、『主の奉献』の祝日です。『主の奉献』とはどういう意味でしょうか。

今日の福音(ルカ 2・22 40)で読まれたとおり、イエス様のお母さんとお父さんであるマリア様とヨセフ様が、律法に定められているとおり、息子のイエス様を連れて聖殿で捧げたことを意味します。律法には、「初めて生まれた男の子は、神様に聖別されるために捧げなければならない」と書いてあるのです。それでは皆様、『奉献』という言葉の意味は何でしょうか。日曜日(1月30日)の兄(金トマス神父)の説教の中に「生きている生贄いけにえになりましょう。」という話がありましたが、生贄を捧げることを『奉献』と言います。では皆様の心の中にある『奉献』の意味は何でしょうか。何を生贄として捧げるべきなのでしょう。

昔のフランスに実際にあった話です。パリの郊外に貧しい人々が増えてきたので、ある教会で募金をしました。「貧しい人々を助けましょう。分かち合いましょう。」というスローガンでした。募金をする人々の行列ができたのですが、その中に一人の目の見えない老人がいました。そして、「これを使ってください。」と言いながら穏やかな笑顔で26フランを置きました。当時の26フランがどのくらいのお金かは、この後の彼の説明を聞けば分かります。人々は、彼が26フランをテーブルに置いたのを見て、驚き、やめさせようと思いました。そして「これはどういうことですか。26フランもお金を寄付するってありえないことですよ。」と言いました。なぜならば、彼は周りの人がみんな分かるくらい貧しく、そして目も見えなかったからです。すると彼は「私はご存知のように目が見えません。目の見える人に、ろうそくをつけるために一年間にどのくらいのお金が必要か聞いてみたところ、平均26フランでした。私は目が見えないからろうそくはいりませんが、一年間のろうそく代のつもりで頑張って26フランを集めました。ですから、この26フランを困っている人のために使ってください。」と言いました。

私たちはふつう、『奉献』と言うと献金を思い出します。献金や教会の維持費、そして貧しい人々やいろいろなことのために募金をすることを『奉献』と考えています。逆の視点で見れば、私たちの献金や奉献は、大体余ったもの、残ったものです。なくてもよいものを出すのが、私たちの姿ではないでしょうか。「100くらい持っているから、そのうち1くらいならば大丈夫だろう」とか、「立場もあるからとりあえずお金を出せばよいだろう」と思いながら献金をするのがほとんどのカトリック信者の姿ではないかと思えます。しかし、「余った物の中の一つ」、「残った物の中の一つ」、「要らない物の中の一つ」では、絶対『奉献』にはなりません。ですから私が強調したいのは、「まず心から始めましょう。」ということです。何かを捧げようとする時、心から始めなければ何も意味がありません。たとえ1億円であっても、余った物の中の1億円では何の意味もありません。本当に神様に感謝の心を持

って、「分かち合おう」「奉納しよう」と思うならば、まず「感謝に一番相応しいものは何だろうか」と考えることが何よりも必要です。

韓国にいた頃、一週間に一回、子どものミサがありました。その時、「親からもらったお金は絶対に献金しないように。」と強く教育しました。日本に来てからは、あまりしていないのですが・・・。「自分の力で何とか集めたお金、自分にとって必要なお金をたとえ1円でも10円でもよいから献金するように。」と強く教えました。最初は物乞いに投げるような姿で献金していた子ども達も、半年くらいそういう教育を続けると、1円でも心をこめて手を合わせて献金するようになります。誰が見ても“可愛いらしい”、“美しい”と感じさせる姿になります。逆に大人の人たちの中には、心をこめたお金やいろいろな奉獻をなさっている方もいるのですが、自分のところに献金袋が回ってきてからお金を探して入れる人も結構います。

「主の奉獻」の祝日を迎えて、もう一回考えてみましょう。何かを神様に捧げようとする時、心も捧げなければなりません。「命をくださった方に私がお礼として表せる心はこれしかありません。」という心で捧げるのが『奉獻』であることを、今日の福音を通して考えてみましょう。

イエス様は私たちのために全て奉獻しました。

ありがとうございました。